
橘くん家の死神ちゃん

UZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

橘くん家の死神ちゃん

【Nコード】

N0390Y

【作者名】

U Z

【あらすじ】

橘秀一はある日突然、偶然と勘違いによって死神と名乗る少女に殺された……はずだった。目を覚ませば生きてはいるものの、どうにも死に易い体質になってしまう。これは即死体質の少年と天然な死神の少女が描くコメディカルストーリー。

000 プロローグ

朝。

俺はいつもの時間帯に起き、朝食を作っている。

フライパンに油を差し目玉焼きのタマゴを冷蔵庫から取り出す。

いつものように朝食を作るはずだというのに、少しだけでも変化が訪れるとなにかとかつてが違ってくる。

まるで間違い探しのようだ。

いつもなら目玉焼きに使うタマゴは一個のはず。

だというのに、取り出すのは二個。

なんでかわかるだろうか？

答えは簡単だ。

一人分、食い扶ちが増えたと言う理由だ。

カツ、コン、カツ、コン。

なんとなくリズムのよい音が聞こえてくる。

キッチンから居間を見れば、そこには茶碗と箸という楽器を使用して演奏をする少女。

ただ、箸で茶碗を叩くだけだというのに何気ない音を奏でているのはご愛嬌。

そんな演奏をする少女こそ食い扶ちが増えた原因である。

一週間前なら、いつもは静かなものでちょっとばかり寂しかった光景もなつかしいものだ。

ふと、少女と目が合う。
食器で演奏をする少女と目が合うと決まって「っ」言う。

「ねえ、ゴハンまだー？」

「いま、作ってる。もうちょい待ってとくれ」

そこで茶碗を叩くリズムが8ビートから16ビートへと変化する。
何気に上手い。

「はいはい、急ぐから静かに待ってなさい」

けれど、リズムが速くなったからと言って朝食のできる時間は早くなるわけではない。

俺はいつも通りの感覚で朝食を作るだけだ。

急ぐと言うのは気持ちだけ。

けれど家の同居人は我慢弱い。

「しゅーいちー、まだー？」

「まだだ」

急ぐと言って10秒だ。

10秒しか待ってくれなかったのだ。

人としてどうだろうか？

普通なら5分くらいは待ってくれるだろう。

よく漫画やアニメで起こされるとき「後、五分」という台詞が何気なく覚えている。

タイトルは覚えてないけど、そのシーンだけは覚えてるから不思議だ。

と、思考していたが、改めて思い直すとアレは人ではなかった。なら人としての常識など問うても無駄か。

「死神はねー、お腹一杯食べないと死んじゃうんだよー」
「なんだよ。そのウサギは寂しいと死んじゃうみたいな言い方は」

タイミングよく少女は自身の正体を口にしていた。
まあ、他が聞けば痛い人扱いされかねないが……。

彼女はと言うと、死神と言う存在らしい。
死神については知らないことだらけだが、お腹一杯食べなくても死なないと言うことだけは知っている。

それがこの橘家に一週間ほど前から居候中のアヤメと言う少女だ。

001 桜並木にて

（一週間前）

陽気な気温の暖かさに桜が咲き乱れる季節。

それは進学、入学のシーズンだ。

新しい学校や新しいクラスなど。

皆、心を躍らせたりするだろう。

かく言う俺も去年は新しい学校の新しい生活に胸を躍らせたりしていた。

まあ、今回俺の場合は進学であり去年ほどの期待はない。

私立水森高校指定の制服を着て、さらに指定された鞆を片手に桜並木の通りを歩いていく。

左右に咲き誇る桜が爽快だ。

ここにレジャーシートを敷いて花見もできるだろう。

ただ、通行人の迷惑になるということを除けばだが……。

そんな中、タツタツと走るような音が聞こえる。

「せんぱーい！」

聞き覚えがある声。

振り向けば見知った顔の人物だ。

「ああ、美春か……」

俺よりも身長が15cmぐらい小さい少女、吉沢美春。

家が近所のため小学校からの知り合い……だったけ？

まあ、知り合いである。

そんな美春は今、俺と同じ学校である水森高校指定の制服を着ている。

「あー、美春も今年からウチと同じ学校だっけ」

「そうなんですよー。えへへ、どうです先輩？」

クルリ……と一回りして制服姿をアピールしてきた。

だから俺はサムズアップして……。

「うん、凄く似合ってるぞ！ どこから、どう見ても立派な中学生だ！」

「むー先輩、私は高校生です！ それに先輩のとこの制服を着てますよ」

恨めがましい視線が突き刺さる。

どこかで視線で人を殺せると聞いたことがあるが、コイツの視線では植物プランクトンを殺すので精一杯だろう。

一言で言えば『微笑ましい』。

「はは、冗談だよ冗談。どこからどう見ても飛び級で入学した高校生だ！」

「むうっ！ー！」

視線がより強みを増してきた。

だが、この程度ではまだまだだ。

ちなみに飛び級で高校の編入は法律では無理だ。

生徒は平等に扱わなければならないという観点から禁止されている。

なるなら、大学や大学院だな。

つと、そろそろ本当に謝らないとまずいな。

前にからかい過ぎて、当分口を聞いてもらえなかったことがある。

「悪い悪い、これも冗談だよ。ちゃんと高校生に見えるよ」

と、謝罪をする。

けれど美春はぶいっと、ソツポを向けて……。

「ふん、だ！先輩なんて辻斬りに合えばいいんです」

「何故、辻斬り？」

辻斬りとは無差別に通行人を刀で斬ることだ。

理由としては刀の切れ味を実証するための試し斬りや、単なる憂さ晴らし、金品目的、自分の武芸の腕を試す為など。

現在は銃砲刀剣類所持等取締法という法律が存在するため刀で斬られることは、まずないだろう。

やられるとしてはナイフか包丁……せいぜい、通り魔だろう。

と、思考しているもこれって遠まわしの死の宣告か？

まずいな。本当に怒ってらっしゃる。

「あー、すまん。本当に悪かった」

少しばかり罪悪感。

今度は頭を下げての謝罪だ。

すると、美春は無言のまま俺の元へと歩み寄り。

「が、あつ!?!」

突然、顔面に謎の衝撃!?

ほんの数cmだけ宙を浮いては地面へと落下しゆく。

それは、まるでボクシングで強烈な右ストレートを喰らってはリングへとダウンするような選手のような。

地面へ落下しゆく俺はそのとき見た。

俺の顔があつた位置にまで右腕を伸ばしきつた美春の姿を。

普通、女の子がグーで人を殴るか?

「ぐへッ!?!」

そしてコンマ2秒。

地面へと落下。

大の字で道路へと倒れ伏せる俺であった。

体を起こすと美春が近づいてきて。

「まだちょっとイラッときますが、これで許してあげます」

たしかにちょっと表情が固いような気がする。

いや……けど、さすがに暴力はいけないと言いたいのだが

「……はっ」

正直言って、今の美春には言い返せません。
怖すぎます。

今日の教訓。

女の方は怒ると怖いので決して怒らせないようにしましょう。

そんなフレーズが俺の頭の中で流れたのであった。

002 騒がしいクラスメイト

桜並木の通りで美春からプロボクサー級のストレートを喰らってから10分。

なんとか斜めにまで、機嫌を直した美春とともに学校へと登校をして行った。

そういえば……子ども扱いとかされるの嫌ってっけな美春は……。

それよりも、あの不機嫌ふきげん解消の後でまだ機嫌が斜めって……。

なんだろうか……もはや傾くというよりもひっくり返ったのだろうか？

多分だが、機嫌が悪いのを45度とすれば、おそらく315度くらいか？

昇降口で美春と別れた後、俺はそんなことを考えていた。

それと、あのストレートを『美春ストレート』と名付けた。

格ゲーならゲージ消費の大技だ。

さて、そんなかんやで教室へと辿りつく。

春休みの登校日以降、久しい上新しい教室なのだが、クラスはあまり変わっていないから残念だ。

そんなとき一人のクラスメイトが声をかけてきた。

「おお、橘か待ってたぞ！」

「ああ久瀬か、久しぶりだな」

声をかけてきた人物の名は久瀬栄士郎。

高校に入っつてすぐに知り合った友人である。

「そんなことより聞いてくれ。スクープだ！ さっき聞いた話なんだがな、入学生の一人に凄い女子がいるらしいんだ」
「へえ……そうか」

別段、そこまで興味はないけど合槌を打つ。

ちなみにコイツは黙っていればクールで知的な眼鏡キャラに見えるなくもないが、本性はちよつとばかり頭のネジが飛んだ熱血系の報道馬鹿だ。

1年で新聞部を設立しては今その部長をしている。

久瀬は、俺の返事がなんであれ話の続きを話なのであろう。
それはこの1年で経験済みだ。

「なんでも今朝、桜並木の通りで男子一名を拳一発でダウンさせたそうだ！」
「っ!？」

待て？

桜並木……拳……男子一名をダウン？

それって、美春のことじゃないか!？

そしてダウンさせられた男子って俺だよ!？

それといきなり噂になるなんて凄すぎです美春さん！

「と、言うわけでこれから取材に行ってくるぞ」
「いや……始業式すら始まっていないのに、上級生が下級生の教室に行くなんて前代未聞だぞ」

そう、さすがに問題というか嫌な噂が立ちそうだ。

それに上級生のイメージが悪くなる。
だが、久瀬は聞く耳もたずと言った感じで……。

「だが、報道には関係ない！ 聞いた話だと彼女の父親はプロボクサーだと言っ噂だ！」

いえ……美春のお父さんは普通の会社員です。

ボクシングをやっていたとか聞いた覚えがありません。

と心の中でツツコンだところで伝わるはずもなく。

以心伝心とか1年程度の関係では不可能だ。

「なーに、やってんのよ？」

と、ここで一人の女子の声が聞こえた。

彼女は、吉沢理奈。騒がしいクラスを束ねる頼れる委員長だ。

そして……苗字からわかるように、あの美春の姉である。

そんな委員長は久瀬の襟を掴んでは引き止める。

その際に首の負荷からか「ぐえ！？」なんて声が聞こえるが気にしない。

「クツ……離せ、委員長。俺はこれから取材として一年の教室に……」

「はあ！？ 今から1年生の教室にってバカじゃないの？」

おっしやる通り……と俺は思った。

「いい、久瀬。まだ入学したばかりの1年生の教室にいきなり上級生が行くなんて怖がらせに行くような物よ。そうなればあんたの新

「聞部の評判だつて悪くなるわ」

「ぬう……それは困る」

「そういえば、現在新聞部は部員が先輩の卒業で3人だったんだよな？」

「5人以上いないと部が成り立たない規則だし、ここで1年生が誰も入らなかつたら存命の危機か。」

「それなら評判を悪くするのは得策ではないな。」

「くっ……致し方ない。取材は後日に延期することにしよう」

「そうブツブツ言いながら席に着いて行く。」

「俺も席に着くか……。」

「と、思ったら突如、襟を引っ張られた。」

「ぐえ!?!」

「情けない声を出してしまう。」

「気が付けば委員長が久瀬の襟を掴んだように今度は俺の襟を掴んでいた。」

「「そういえば、秀一に聞いておきたいことがあるんだっただけ」

「「な、なんだ……?」」

「なんとなく予想はできてしまう。」

「「なんとって、美春の姉なのだから。」

「「さつき美春と会ったんだけど、えらく不機嫌だったのよね。秀一、アンタ何があったか知らないかしら?」」

「ナ、ナンノコトデシヨウカ？」

まずい……つい声が裏返ってしまった。

俺の同様ぶりに委員長の目付きが鋭くなる。

ちなみに、委員長は妹と違い視線でナウマン象すら殺して見せそうなほど鋭い。

どうやら、このまま尋問だな。

とりあえず、俺は一切の抵抗を諦めた。

003 謎のロープの少女

「豆腐に卵……よし、揃ってるな」

学校の始業式を終えた後、俺は2週間に1回ぐらいの確立でスーパーに立ち寄る。

それも、一人暮らしを行なっているためだ。

両親は二人とも海外で出張中。

そのため俺一人が国内に取り残されたのだ。

まあ、俺の意思でもあるのだけど。

そういうわけで炊事は一通りできる。

もっとも、昔……一人暮らしを始めた頃に美春にご馳走したのが「まずいです」と言う一言で斬り捨てられたことは悲しかった。

アレから必死になって努力したのはいい思い出だ。

そつだな、今度またアイツにご馳走してやるか。

見返してやるためにもな！

と、考えているながら俺はスーパーの袋を片手に帰宅して行く。

今日は始業式だし半日だったし、そのままスーパーに直行だったから腹が減ったな。

たしか夕飯の残りがあつたはず……。

「ん……なんだ、ありゃ？」

俺はそのまま道路を歩いていると向かい側に変な物を見つけた。

いや変な者か。

まるでファンタジーな世界から現代へと転移したかのような真っ黒いローブを着た人物が歩いてくる。

もっとも、ローブで顔が隠れているためどんな人物かはわからない。

どこかで仮装大会でもあるのか？

それに、やけに背丈が小さい。

中学生くらいだろうか？

まあ、あまり関わりたくないのが本音だ。

このまま無関係にすれ違おうなんて思ったのも虚しく、そのローブの奴は俺に話しかけてきたのだ。

「ねえ……」

「な、なんだ？」

表情が見えない奴に声を掛けられるとか……酷く不気味だ。けれど、声は澄んだように綺麗な女の子の声だった。

「この辺にたちばなって名前の人、知らない？」

なんだ、ただ家を探ねて聞いてきただけか。

あんな、格好だし変なことでも言ってくるのかと内心ひやひやした。

って……たちばな？

「さあ……たちばなって言ってもこの辺には色々あるからな。俺

も橘^{たちばな}だし……」

「え……？」

突然、ローブの少女から間の抜けたような声。

俺、何か変なこと言ったか？

すると少女は踵を返す。

まるで、彼女が探しているたちばなという人物などもう用がないかのように歩き出し一言つぶやいた。

「そう……貴方……だったんだ」

その声は酷く悲しげだったのが印象に残った。
なんで、悲しげだったのかはよくわからない。

けれど、俺はつい立ち止まり背を向けて歩く少女を見送った。
そのまま少女は見えなくなっていく。

「なん、だったんだ？」

俺は、そんな少女の毒気に当てられてしまったのかホウゼンと立ち尽くす。

それにしてもなんであんなに悲しげな声だったんだろう？

ぐう……。

「っと、そうだ……昼飯まだだったんだよな」

けれど、腹の音で我に返ることができた。

なんとなく、まだ気になるのだけど、どうやら俺は食欲のほうか

上回ったらしくそのまま帰ることにした。

004 夜中の襲撃者

夜。

始業式からスーパーに立ち寄った後のことだ。

家に帰った俺は早急に昼食を作っては食べて後は怠惰に過ごした。

ちなみに怠惰と悪くは言ったものの、漫画を読んだりゲームをやったりと健全な男子高校生としては普通のことだ。

楽しいことをやっていると時刻というのはあつというまに過ぎるもので、気付けば夕食の時間。

あまりやる気も起きなかつたのでスーパーで安かつたから買ったおいた焼きそばを作っては食べた。

さて、現在は夜中。

コンビニに来ている。

何故、コンビニなのか？

それは、深い事情……などなく単純なことだ。

風呂上りに飲むはずだった牛乳の消費期限が切れていたからだ。別段、1日ぐらいならなんとか考えると考える人物もいるだろう。

だが俺は違う。

昔、消費期限が一週間も過ぎた牛乳を飲んでから誓ったのだ。消費期限ないし賞味期限が切れた食品には一切手を出さないと

いや、別に誇れることではないのだが。

そうして俺はコンビニで牛乳と適当にお菓子を買っては帰宅する。

そこまではいい。

問題は帰宅後だ。

自宅にて俺は鍵を取り出し、開けるつもりだったが、開かない。

もう一度、鍵を使う。

今度は開いた。

本来ならここで鍵を掛け忘れたというオチだろうけど、俺は確かに鍵を掛けたのを覚えている。なら、何故？

答えは明白だ。

俺以外の誰か鍵を開けたのだ。

「っ……！？」

嫌な汗が頬を伝う。

両親は今、出張中だ。

いるはずがない。

ご近所の人。

勝手に入るわけがない。

友人や知り合い。

久瀬や美春ならやりそうだが、合鍵などを渡した覚えはない。

空き巣。

「やっぱり……そうだよなあ……」

このときの俺はどうかしていた。

人間、焦ると冷静な思考ができなくなるものだ。

ポケットには携帯があるものの警察に連絡という手段が選択肢からはずれていたのだ。

俺はそのまま、中の空き巣に気付かれないように家へと入る。

自分で解決しようと思わしてしまったからだ。

武器という武器はない。

せいぜい、玄関においてある靴べら程度だ。けど、ないよりマシだった。

靴を脱いでは忍び足でまず廊下に出る。異常なし。

まるで俺が空き巣のようだ。

そんなとき物音が聞こえた。居間からだ。

緊張のあまり自身の心臓の鼓動が伝わる。チャンスは一回きりだろう。

相手が気付かないうちに奇襲をかけて捕まえる。はー、と深呼吸をしてはゆっくりと廊下を渡り居間の前。

誰かいる。

靴べらを上段へと構えた。

まずはイメージだ。

相手へどのように奇襲をかけては、倒すのかを

すぐに居間へと突撃し靴べらを上段から叩きのめす。

相手が驚き動揺している最中に蹴りや拳で問答無用で打ち倒す。

俺は空き巣を倒すイメージをする。

イメージだが、するのとしなのでは明らかに違う。

相手に気付かれないように一息。

足音が聞こえた。

近い。

絶好のチャンスだ。

俺は決意を決める。

そのまま、大声とともに突入する。

「っ……そこまでだ!!!」

「!?!」

思っていた以上に大きな声が出た。

だが、それでいい。

気付かれない状況でなら大声は相手を予想以上に驚かせる。

結果、相手は動きを見せない。

これ以上とないチャンス。

思ったより相手が小さかった。

少なくとも俺以上の背だと思っていたが、まるで中学生だ。

少しばかり拍子抜け。

だが、勢いが強すぎて止まらない。

俺はそのまま両手で握った靴べらを力一杯相手へと振り下ろす。

それは相手を叩く……はずだった。

スツット一瞬、何かが閃く。

一瞬だったからよくわからない。

それに遅れてカランと言う乾いた音が聞こえた。

つい、視線を向けてしまう。

「え………？」

それは、靴べら……の先端だった。

気付けば俺が持っている靴べらは二つに分かれていた。

切り口は鮮やかともいえるほど綺麗に斜めに斬れていた。

まるで達人が斬ったようだ。

すると、チャキツと金属音が聞こえる。

視線を向ける。

部屋は暗くて相手がよく見えないのだが黒いローブを着ているの

が理解できた。

昼間に会ったあのローブの少女を思い出してしまう。

部屋には微かに月なのか街灯かは知らないが明かりが差し掛かっている。

その明かりを反射するように日本刀の刃が怪しげに輝いていた。

日本刀？

「あ、う……」

まともに声が出せない。

俺は刀の恐怖からか数歩下がっては腰を抜かして尻餅をうってしまっ。

するとローブの人物は数歩、俺へと近づいては刀を構えなおす。突きを穿つ構えだ。

そんな中、俺はある言葉を思い出してしまった。それは朝……登校のときに

『ふん、だ！ 先輩なんて辻斬りに合えばいいんです』

合った……合ったよ！

なんだよ、美春の言ったことが現実になっちゃったよ！？ エスパーク？ 超能力者（レベル5）か！？

いかん、変な思考が混じってしまった。冷静に見つめ直す。

俺は腰を抜かして立ち上がることがままならない。
対して、相手は突きの構え。

……詰みだ。

そんなときローブの人物は優しげな口調でつぶやいた。

「大丈夫だよ。死神のあたしがすぐに成仏させてあげる」

言っている言葉の意味は理解できなかった。

けど、透き通るような綺麗な声は確かに聞き覚えがある。

それは、確かに昼間に会った少女の声だ。

けど、それ以上思考する猶予はもらえなかった。

瞬間

俺の胸に日本刀が突き刺さった。

005 死神との出会い

目の前は真つ暗だった。

まるで深い……深い……光さえ届かない海。

ただ暗闇へと堕ちていく。

体の自由はなく感覚もない。

ただ覚えているのは自身の胸に刺さった日本刀だ。

ならわかる。

俺は殺されたのだ。

これが 死なのか？

呆気ないものだ。

悲しくは……ない。

けれど後悔はある。

ただ、もうちょっとだけ生きていたかったと

死ぬとわかっていたならもうちょっとだけでも平凡な日常を堪能しておきたかった。

だから、強く思ってしまう。

死にたくない……と

けれど、叶えられるはずもないと理解していた。
だから抵抗を止めて身をゆだねる。

けれど、少しばかり後悔を残して。

そのまま俺は意識を自身の深い闇へと沈めていった。

「はっ!？」

気が付けば知らない天井……な、わけはなく見に覚えのある天井
だった。

自宅それも居間の天井だ。

え……居間の天井？

「なんでだ？」

ふと、疑問に思う。

俺は殺されたはずだった。

ならば、自宅の居間で目覚めるはずはない。
それはつまり死んで生き返ったこととなるのだから。

ふと、俺は刺されたはずの胸を見る。

けれど

「傷が……ない？」

そうなのだ。

刺されたのなら傷があるはず。

それどころか血の跡すらないのだ。

服は元のままだし服の胸の部分には小さな切れ目ができているだけだった。

まるで日本刀で貫通させたような……。

けれど身体には傷がないのだ。

どういうことだ？

俺は考えた。

けれど考え付かなかった。

何故、こうなった理由を

だから俺は一つの結論に達した。

「そうか　夢、だったのか」

夢とは都合のいい言葉だ。

理解しきれず、おぼろげにしか覚えていなのならそれは全て夢で片付けられるのだ。

だから俺もそう思い込むことにしようとした。

だというのに俺の願望虚しく奴は突然やってきた。

「あー、やっと起きた!」

子供のような声。

振り向けば黒い……ローブを着た……人物!?

しかもその左手には鞘に収めているものの日本刀らしき物まであるのだ。

「う、うわああああああああ!!」

絶叫。

俺は腰を抜かしたような体勢のまま人とはありえない速さで壁まで下がる。

だって仕方ないだろう。

夢か現実かは知らないが俺を殺した人物が突如目の前に現れたのだから。

けれど、ローブの人物はそんな俺を見てはまるで傷ついたような口調だった。

「もう、ひっどいなあー。まるでおばけ扱いだよー」

いえ、おばけではなく辻斬りです。

とツッコミたくなつたが声もうまくでない。

俺ができるのは怯えるだけだった。

すると、ローブの人物は俺へとゆっくりと近づいてくる。

殺さないでくれと言いたいのだが喉の奥が悶えて声が出ない。

一步。
また一步。

そして刀の間合いへと入る。
そんな時、俺の恐怖は絶頂を向かえた。

喉の問えがとれ、声が出るようになった。

「お、俺を殺すのか？」

命乞いではなく疑問形で問うてしまう。
慌てるとそんな簡単なことさえできなくなってしまうのだ。

けれど、そんな疑問は疑問で返されてしまった。

「殺す？　なんで？」

「え……？」

呆気にとられる。
意味が理解できない。

確かにコイツは俺の胸をその日本刀で刺したはずだ。
殺すという理由がなければそんなことはしない。

「なら、お前は一体何者なんだよ……？」

第二の疑問を問う。

俺を殺す目的でないのなら、その正体も不明。

ならその正体を問うのは当然のことだ。

「正体？ んー、人に言うのはちょっとまずいんだけどなー」

迷うような素振り。

人に言うのはまずい？

ほんと意味不明だ。

わけがわからない。

「けど……事情が事情だし、特別に教えてあげるね」

すると、ローブの頭の部分を下ろした。

そこには一人の少女の素顔が見えた。

日本人離れた銀色の髪がなびく。

瞳も日本人には到底思えない赤い色。

いや、日本人ではなくもはや人間離れと言ってしまうても過言ではない。

一言で言えば綺麗。

けれどその綺麗という度合いも人という範疇を超えているような気がする。

そんな中、少女は問いに答えた。

「あたしは死を司る者。その名も死神です」

006 死神の証明

「死神……だと？」

正直言っただけ信じがたかった。

なにせ俺は生まれたから16年間、一度として死神などと会ったことはないからだ。

否。

会うはずがない。

存在するはずがない。

死神と名乗るのは全て自称。

だというのに、俺は目の前の少女をわずかにも死神だと思ってしまった。

何故だ？

まずは見た目だ。

日本人として生きて今までみたことのない銀髪。

黒とか茶色が混じっているのが普通だろう。

なのに銀色に髪。

さらには赤い瞳だ。

美しく思えるのだが、その色はまるで血の色だ。

人間離れ。

そんなフレーズが俺の脳内で流された。
だから俺は彼女を死神として認めることに……

「って、できるかいつ!？」

「うひゃ!？」

叫ぶ。

もし、ここに卓袱台があれば勢いでひっくり返しているだろう。

不覚にも信じてしまいそうになった。

見た目に騙されるな。

銀髪だって今となれば簡単に染めることも可能。

瞳だってカラーコンタクトがあるだろう。

だから俺は言う。

「……信じられるか」

「え?」

死神を名乗る少女は今の声が聞き取れなかったのか首をかしげる。
だから、俺はもう一度言う。

「信じられるか。死神なんて架空の存在なんてあっていいはずがないだろ!」

少し強めに叫ぶように言う。

すると少女は頬を膨らませる。

怒っているのがわかる。

「そ、そんなことないよ！ れっきとした死神だもん！」

反発の言葉。

少しばかり不快に感じた。

だからでこそ、俺はこう口にした。

……いや、してしまった。

「なら、自分が死神って証明してみる！」

「む……」

少女が頬を強張らせる。

無理だ……と俺は思った。

だって、そうだろう。

架空の存在の証明だ。

それを納得させるのに何をすればいい？

答えなどない。

俺はそう思っていた。

けれど少女は違った。

「わかったよ。じゃあ、証明できたら信じてよね」

今なお顔は強張った状態で言った。

何をする？

信じられないながらも、ちょっとだけ少女の行動が気になってしまっ。

もし、死神と証明できるようなことがあるのだったら何だろうか？

心の片隅ではそのような疑問が浮かぶ。

すると、少女は自身の刀を鞘に収めている状態のまま両手で上段へと構えた。

そして軽く振り下ろす。

ガンッ

「グアッ!？」

そして俺の頭に命中。

刀はまるで本物のような重みだった。

実質、小突いただけだろう。

けれど痛い。

俺は数歩後ろへとよろめく。

痛みでなのか感覚がおかしくなったのか浮遊感を感じる。

そのまま、背後でドサツと音が聞こえた。

なにかが落ちたり、倒れたような音だ。

後ろを確認する。

『なんだ……？』

人だ。

それも高校生ぐらいの男性が倒れていた。

だが、その姿には見覚えがあつた。

男性としては少し長いかもしれない髪。

水森高校の制服。

それは鏡で毎回、顔を合わせる存在。

すなわち俺自身だった。

『つて……俺が倒れてるツ！？』

なら、今の俺はなんだ。

自身の手を見る。

なんだか透けて見えた。

「ほら、証明だよ」

『な……なにをしたんだ？』

今、この状況が理解できない。

けれど少女は何か得意げな感じだった。

「んーとねー、肉体から魂が抜けたんだよー」

少女が軽い口調で言う。

不可解だ。

けれど、何気なく辻褄が合ってしまう。

そこに倒れているのは正真正銘の俺で抜け殻だ。
そして、今の俺は肉体を持たない俺。

そう考えると今、倒れている自分自身の証明がいく

いや、それってもしかして……。

『俺って……死んだのか？』

「んー、そうだねー」

少女がうなづく。

やはり。

あくまで俺のイメージだが、肉体から魂が離れるのを死という状態だと俺は思っている。

なら、この状況は直球で死だと言えてしまうだろう。

『って、死んだあ!?!?』

その現実を理解した俺は思いっきり叫んでしまったのだった。

007 証明の結果

拝啓、父さん母さん。

俺……いや、私橘秀一は死んでしまいました。
ネタではありません。ガチです。マジです。

と……絶賛、現実逃避の最中だったのだが逃げた所でしょうかな
い。

現状を整理すると、今俺の目の前には動かなくなった俺自身がい
る。

そして今の俺は若干、透けているのだ。

つまりは死んでしまった。

正直言って信じられない。

けれど、この状況に対し浮遊感、物を触ろうとしても擦り抜ける
という事実が俺の状況を肯定してしまっているのだ。

「どう、これで信じてくれたー？」

声をかけるのは死神を自称する少女。

しかも、俺をこの状況へ陥れた張本人だ。

死神であるということを確認しると言ったら鞘に収めた刀で小突
いてこのような状況になった。

って……小突いて……？

ここでちょっと考えてみよう。

俺は鞘に収まった刀で軽く叩かれたのだ。

無論、その刀は本物のようで重みがあり痛かったが、さすがに死ぬほどの痛みではない。

抜き身だったなら話は簡単だ。

けれど殺傷能力のない状態で一発、軽く叩かれただけで人は死ぬのだろうか？

死ぬはずがない。

死んでたまるか。

チビ状態のマ オではあるまいし

なら、何故死んだ？

死神………なんとというか、死を司る者とか言っていたよな。

たしかに死の神様なんだし

それなら、人を死なせたり生き返らせたりできるかもしれない。

もしかしてこれがあいつが言っていた死神だという証明なのか？

不可解ながらも論点が繋がる。

いや、繋がってしまった。

「………ああ、わかった。信じてやる、けれど俺を元の状態に戻せるのか？」

と俺が言った途端、自称死神……いや、死神は得意げに笑った。

「やっと、信じてくれたよー。うん、ちゃんと元に戻せるから」

よかった。

俺は心の中で安堵の息をついた。

それもこんなくならないことで死ぬなんて。
さすがに死んでも死に切れない。

そうすると、死神の少女はまず俺（精神）の方へと近づいてきた。

「それじゃー、戻すよー」

「で、どうやって戻すんだ？」

「えへへ、それはねー……」

と会話の途中で死神の手が俺の胸元に触れた。

物に触れようとしても擦り抜けるといふのに触れるなんて、さすがは死神……と、言ったところだろうか？

けれど、俺はこのとき知らなかった。

死んだ者が生き返ると言うことの大変さを……。

「えい」

『な……おうわあ!?!』

胸倉をつかまれ俺（本体）へと放り込まれる。

精神状態の俺はそのまま自身の肉体の中へと潜り込むのだけれど

行ったり、来たり。

そんな感じで俺は自身の肉体へと押し込められては弾かれてと繰り返す。

肉体がない状態だと言うのにその感覚ははっきり言って吐き気を催された。

そうして俺は肉体に入りきるまで出入りを繰り返されたのであった。

深夜の2時頃。

本来なら俺はすでに眠っており明かりがつくはずがない俺の家の居間の明かりがついている。

それもこれも、今日の夜の襲撃者のせいである。
俺は件の襲撃者であり死神と名乗る少女へと視線を向けた。

「くぐくぐ……ぶつはあ〜」

ソファに座りながらリンゴジュースをコップに移すことなくスーパ〜とかで市販されている容器のまま飲み干していた。

ちなみに、それは家の冷蔵庫に入っているものと同じ種類であり俺は奴に渡した覚えはない。

そんな盗人紛いのことをしているのだが、ソイツは死神らしい。
もつともその証拠として一度、魂を抜かれたため認めざるをえなかった。

「そう言えば、なんでその死神が俺の家に来ているんだよ？」
「ん〜？」

そう、色々あったがこれが一番の謎だ。

目の前の少女が死神であることは認める……認めるが何故、俺の家に来ているのか？

心当たりがないのだ。

それ以前に俺は一度、奴の刀で殺されたのだ。

痛みなどは感じなかったものの胸に刀の刃が刺さったのだけは覚

えている。

あれは夢だと思ったのだけど、先ほど俺の身体から抜けた魂を戻したことを考えれば殺されたと考えても話は通ってしまうからだ。

「あー、それはねー」

すると、死神はまるで照れくさそうな笑みを浮かべた。

「ごめんね、人違いでした」

「……は？」

この瞬間、時間が止まったように感じた。
何て言った？

人違い？

「え、つと……立華衛くんじゃ……ないよね？」
たちはなまもる

「ああ、俺は橘秀一だけだ」

ちなみに立華という名字の家は近所に一軒存在する。
いや……もしかして、同じ読みの名字だから間違えた？

すると、死神は少し真面目そうな表情で語った。

「あたしたち死神の仕事でね。死んだ人の魂を成仏させるのがあるんだよー」

「……まあ、死神って言うんだし何となくわかるけど……」

死神。

死をつかさどる神という意味ならば、人の魂を管理するというイ

メージがある。

なら、その成仏させるといふ言葉は自然に信じてしまえる。

「それで、この刀！ これを使って人の魂を斬ることで成仏することができんだよ！！」

自慢げに刀を見せてくる。

けど、その刀の餌食となった一人としてあまりいい気分じゃあないな。

けれど、これで魂を斬れば成仏させることができる？

なんか死神の鎌とかそういうようなものだろうか？

「……もしかして、お前はその立華衛という奴の魂をその刀で斬るのが目的だったのに、間違えて俺を斬ったと？」

「ご明察」

パチパチと拍手を送られた。

いや……正解しても嬉しくないから。

けど、これでなんとなくだが疑問は解消した。

「ふう……そうかい、ならとつとと仕事に戻って出てっくれ。俺ももう寝ないとだからな。ふあ〜あ」

これ以上、起きていたら明日起きれなくなる。

それにもうこれ以上厄介事に巻き込まれるわけでもないし、早く寝ないと。

俺は立ち上がり大きな欠伸については目の前の死神を追い出そう

と心見るが……。

「あ、ごめんねそれ無理」

「は………？」

けれど、俺の言葉は笑顔で否定された。
そうして、次に予想外の言葉が交わされた。

「貴方、今死に易い体質になってるから」

「今……なんて言った？」

目の前の死神が言った言葉を俺は理解しきれなかった。いや、正確には『理解したくない』が正解だ。

どうか聞き間違いであってくれ……。

「うん、聞こえなかった？ 貴方今ね、凄い死に易くなっちゃってるんだよ」

はい、聞き間違えじゃありませんでした。ちくしょー。

「なんで、死に易くなっただよ？」

「それがね、アハハ……」

俺の問いに死神は乾いた笑みを浮かべる。

その笑みは明らかにコイツが原因だと語っているように見えた。

「えっとね、あたしが最初間違えてコレで貴方を斬っちゃたよね？」

「ん、そうだな」

そうして見せてきたのは死神の鎌みたいな役割の日本刀。

なんでも、これで人の魂を斬れば成仏させるらしい。

すると、死神はまるで0点のテストの答案用紙を親に見せるかのような雰囲気です。

「実はコレ……生きてる人にも有効なんだよ」

「え……？」

生きている人物にも有効？

それって、そのまま斬っても成仏させることができるってことなのか？

「なら、俺は一度成仏したとか……？」

「だ、ダイジョブだよ。体から魂が抜けたときに無理やり押し戻したから！」

「なら、なんで死に易くなっただよ？」

今までの説明を聞いても話の本質には至らない。

だから、俺は直接尋ねることにした。

厄介事に絡まれたこともあってちょっと乱暴な口調になってしまったが。

「え、え〜とね〜戻した、んだけどね……」

「戻したんだけど？」

死神は自分の人さし指と人差し指をくっつけては言うのをためらっている。

視線も宙を泳いでいる。

「戻したんだけど？」

だから、俺はもう一度一文も変わらず同じ言葉を繰り返す。
すると決心したのか語り出した。

「た、魂と体の定着がおかしくなっちゃって……抜けやすくなっちゃった、テヘッ」

死神はいい笑顔でそう答えた。

それはまるですっかりとドジなことをしてしまったような雰囲気
で。

漫画とかならここで「このすっかりさんめ」と軽くおでこを小突
いては許すのだろう。

だから俺も……。

「って、許せるかっ!?!」

「うひゃ!?!」

ノリツツコ!!!。

いや、ボケてる余裕はないのだけれど。

「いや、抜けやすくなっちゃったって……ちょっと待て? たしか
俺を小突いたときにはもしや……」

「うん、」明察「

そういえば心当たりがあった。

俺がコイツを死神だと信じられる証明してみると言ったときに俺
は刀の鞘で小突かれた。

そのまま体から魂が抜けたのだけ。

あの時は、ただ何か死神の能力が何かで抜けさせたと思っていたんだが。

あれって……本当にただ小突いただけだったのか……？

「おいおい……小突かれた程度で死ぬってどういうことだよ……」

俺は頭を抱えた。

いや、本当に絶望的だろ。

平凡な日常生活がいきなり命がけの生活に早変わりだよ。

「そうだね、まるでスペンカーだよね」

「おい、いきなり他人事かよ」

ちなみにスペラカーとは、とあるテレビゲームのことだ。

自身の半分の身長の高さから落ちてでも死ぬという史上最弱の主人公らしい。

この状況を考えればまったく笑えない。

と言うよりもよくそんなレトロゲームを知ってるよな？

「でも、ダイジョブだよ」

「え？」

けど、ここで予想外の言葉を掛けられた。

「あたしなら、魂が抜けた状態でも元に戻せるから！」

「あ……そういえば……」

そうだ。

俺は1度、いや2度か。
生き返らせられたんだよな？

ならば体から魂が抜けたとしても元に戻してもらえるのなら……。

「と、言うわけで今日からお世話になるね」

「……は？」

俺の心の中に希望の光がさしかかった頃に、またコイツは突拍子もない事を言いやがった。

「待て！ なぜお前がお世話になる必要がある？」

「えー、だって貴方今死に易いじゃん、それであたしはそれを戻すことができる。ね、一緒にいたほうがいいじゃん」

「あーそれはそうだけどなあ……」

けど色々と問題があると思うのだけど。

一応、コイツも女の子であるわけであるし……いやそれ以前に人ではないのだけど……。

「それにこれでもう、寝床探したりご飯がなくて苦勞することもないから」

「おい、そこ本音が漏れてるぞ！」

俺は全力でツツコミをいれた。

けど、最終的には俺はその死神を家に住まわせることになってしまったのだった。

翌日……とでも言えばいいのだろうか？

いいとも悪いとも言えない目覚めで目覚まし時計に起こされた。それは、いつもと変わらない一日の始まりのようだ。まるで昨日の出来事が嘘だったとでも言つかのような……。

「はあ……嘘であつたらどんなにいいか……」

ついついため息をついてしまう。

けど、昨日の記憶ははつきりと覚えている。

勘違いで殺されて、生き返ってはまた殺されて……死に易い体質になったと告げられて……。

「信じがたいけど、真実なんだよなあ」

俺はそのまま、寝巻を乱雑に脱ぎ捨てて着替える。

今日は、土曜日ということに制服ではなく私服をタンスから取り出す。

昨日の出来事もあって今日が休みだったのは幸いだ。

そうして着替えを済まし自室から廊下へと出る。

居間へと向かう最中に俺は足を止めた。

とある部屋の前。

現在、海外へ出張中の両親のおふくろの部屋である。

昨日から（無理矢理）この家で居候となった死神を寝泊まりさせる際にこの部屋にした。

俺は軽く扉をノックする。

一応、得体や素性もまだ把握しきれていない部分も多い。警戒の意も含めての確認だった。

けれど、ノックでの反応の素振りが無い。

次は、少し強く叩くもののまるでぬけの殻とも言えそうな反応である。

まさか、本当にいないのか？

そう疑問に思った俺は静かに扉の戸を開ける。

「……すう……すう」

熟睡していた。

かすかな寝息とともに、ベッドの上で死神と名乗る少女が寝ている。

少しばかり拍子抜けした気分で俺は戸を閉めた。

「……あれ？」

戸を閉めたとき俺はふと気付いた。

昨日の衝撃があまりに強くて気付いていなかったがある意味では凄く重要なことだ。

なぜ、気付かなかったのかと自問自答しながら俺は口にした。

「あいつの名前って……聞いてなかったよな？」

いまさらだ。

ずっと、あいつのことは単に死神という単語だけで済ましていたから気付かなかった。

俺は頭の後頭部を掻きながら軽くため息をついて居間へと向かう。

「まあ……後で聞くことにするか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0390y/>

橘くん家の死神ちゃん

2011年12月11日15時55分発行